The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	定家本『後撰和歌集』における校訂意識
Author(s)	竹端, 紀子
Citation	詞林. 2016, 59, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57907
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

定家本『後撰和歌集』における校訂意識

竹端　紀子

はじめに

現在、『後撰和歌集』の諸本は、杉谷寿郎氏の『後撰和歌集諸本の研究』[1]によって（1）汎清輔本系統（2）古本系統（3）承保三年奥書本系統（4）定家本系統の四つに大別される。

藤原定家は、その生涯に幾度となく『後撰和歌集』を書写したことで知られ、現在確認されているものだけでも、無年号本として無年号A類本・無年号B類本、年号本として承久三年本・貞応元年七月本・貞応元年九月本・貞応二年本・寛喜元年本・天福二年本・嘉禎二年本の七種が存在する。これら定家本諸本は、年次を追って本文が変化しており、定家の『後撰和歌集』本文研究の成果を段階的に示している。

定家本『後撰和歌集』における展開の様相については、岸上慎二氏によって「無年号A類本から同B類本へ、さらに年号本諸本へと、家伝の一系の本文が、定家の校訂によって発展、展開していったものである」[2]ことが明らかにされた。さらに、定家の校訂態度について片桐洋一氏は、「彼が本文を問題にするのは、いわば問題のある箇所に限られており、その部分の疑問を解決する本であれば、その本来的系統や性質などを問題にせず、その部分のみを改めるという態度であった」[3]と指摘している。定家は、絶えずよりよい本文を求め、他本との照合により、自身の『後撰和歌集』本文を校訂していく態度であったと言えよう。

定家本『後撰和歌集』の研究は、これまで不断に推し進められてきたが、その研究は定家本諸本の系統分類に重点が置かれてきたことは否めず、本文校訂の具体的様相について言及した論考は少ない[4]。そこで稿者は、改めて定家本諸本間における本文異同を調査し、どのような過程を経て天福二年本に至ったのか、定家本『後撰和歌集』の展開について再検討を試みた。本文異同の具体的様相を考察することによって、定家の校訂意識の一端を紐解きたい。

なお、定家本諸本間の比較対照に当たっては、以下の諸本を対象とし、[5]本稿では【】内の略称によって示すこととする。

《無年号A類本》

・京都大学図書館蔵・中院本【中院[6]】

・国立歴史民俗博物館蔵・飛鳥井雅有奥書本【飛鳥井】

《無年号B類本》

・国立歴史民俗博物館蔵・伝二条為世・為冬・為重寄合書本【二条】

・宮内庁書陵部蔵・家仁親王奥書本【家仁】

《承久三年（1221）五月二十一日書写本》

・宮内庁書陵部蔵・二十一代集本【二十一】

・宮内庁書陵部蔵・葉室家旧蔵本【葉室】

《貞応元年（1222）七月十三日書写本》

・宮内庁書陵部蔵・東常縁筆本【常縁】

《貞応二年（1223）九月二日書写本》

・国立歴史民俗博物館蔵・藤原俊定奥書本【俊定】

・太山寺蔵・伝橋本公夏筆本【太山寺[7]】

《天福二年（1234）三月二日書写本》

・藤原定家筆天福二年本【天福[8]】

一、作者名表記における定家本『後撰和歌集』の展開

『後撰和歌集』の作者名表記は、古くより形式が不統一であることがしばしば指摘されてきた。定家自身も奥書に「或先達説云此集作者名等頗以狼藉」（無年号B類本）と記しており、定家が所持した「家本」にも、作者名表記に相当な乱れが生じていたことが窺えよう。

ここで、定家本諸本間において、同一作者でありながら、表記の異なる用例を【表1】にまとめた。全体的な傾向として、承久三年本の段階で、天福本に至る本文の基礎が築かれたことが確認できる。[9]

定家本『後撰和歌集』の作者名表記をめぐって、杉谷寿郎氏は「定家は論拠をもってその表記を改訂しており、表記の統一もはかっている」と述べられた。[10]その際、定家が論拠としたのは、言うまでもなく勅撰和歌集における作者名表記の原則である。ここで、杉谷氏の論考では言及されなかった302番歌を対象として、作者名表記における本文校訂の様相を確認したい。

題しらず　天智天皇御製

秋の田のかりほのいほのとまをあらみわが衣手はつゆにぬれつゝ　（天福本・秋中・302）

【表1】に示す通り、当該歌の作者名を、無年号A類本・B類本は「あめのみかどの御製」とする。[11]本来「あめのみかど」とは、天皇の尊称であり、特定の天皇を指す言葉ではない。[12]定家は、如何なる理由から、「あめのみかど」を「天智天皇」と認定したのか。

異本系統に目を向けてみると、[13]二荒山本・片仮名本・堀河

本・承保本が「天智天皇御製」とする。[14] 定家が、他本との照合によって根拠を得たことが想定されよう。加えて、当時の時代背景も絡んでいるのではないだろうか。

この「あめのみかど」という名称は、『古今和歌集』702番左注にも用例が見出せる。

（題しらず）　（よみ人しらず）

梓弓ひきののつづらすゑつひにわが思ふ人に事のしげけむ

この歌は、ある人、あめのみかどのあふみのうねめにたまひけるとなむ申す（古今集・恋歌四・702）

当該左注における「天帝」について山田孝雄氏は、少なくとも平安中期まで「あめのみかど」は聖武天皇を指していたが、平安末期以降、藤原仲実の『古今和歌集目録』より、「あめのみかど」は天智天皇として認識されるに至ったことを明らかとされた。[15] 俊成や定家の見解は、管見の限り見出せないが、清輔の『袋草紙』に、

難者云はく、「古今目録の如きは、「天の帝」と号するは天智天皇なり、如何」。答へて云はく、「件の帝一名を天命開別天皇とするの故なり。……」（袋草紙・上巻）[16]

とあるように、「あめのみかど」が「天智天皇」であるという認識は、その当時には周知の事実であった。

そして、校訂後の「〇〇天皇御製」という表記は、勅撰和歌集の原則に基づいた校訂と見て良い。かつて勅撰和歌集の作者名表記を通時的に検討した井上宗雄氏は、天皇御製歌の作者名は「光孝天皇までは天皇、宇多天皇以後は院と表記する。（宇多・醍醐・村上のみは夫々亭子院・延喜・天暦とある）」と指摘した。[17] 事実、定家が撰者として関わった『新古今和歌集』を例に取ると、「仁徳天皇御歌」（707）・「天智天皇御歌」（1689）・「持統天皇御歌」（175）・「元明天皇御歌」（896）・「聖武天皇御歌」（897）・「光孝天皇御歌」（1349・1356・1413）と、光孝朝以前の天皇御製歌は一貫して「〇〇天皇」と表記する。つまり、「天智天皇御製」という表記が、勅撰和歌集として最もふさわしい表記なのである。

このように、作者名表記における同一人物の本文異同を見てゆくと、勅撰和歌集の形式に則り、表記をより整序するために校訂されていることがわかる。

二、詞書における定家本『後撰和歌集』の展開

二―一、詠歌状況に即した詞書の校訂

定家が、父俊成から相伝したと思われる「家本」の他に、複数の諸本を持ち合わせ、本文を書写校訂したことは、かねてより岸上氏や片桐氏によって指摘されてきた。本章では、詞書の本文異同に焦点を当て、定家がどのような意識のもとに校訂を行ったのか、考察を試みたい。

はじめて人につかはしける　　よみ人しらず

思つゝまだいひそめぬわがこひをおなじ心にしらせてし哉

（天福本・恋六・1012）

当該歌の詞書は、定家本諸本間で【表2】に示す本文異同がある。年号本以降は、「はじめて人につかはしける」とあり、具体的な詠歌状況を示す。ここで、異本系統に目を向けると、承保本「はじめて女につかはしける」、伝坊門局筆本「はじめて人につかはしける」と、年号本と類似する詞書を有する。[18]「まだいひそめぬわがこひを……しらせてし哉」とあることから、「はじめて人につかはしける」という詞書は、当該歌に即した詠歌状況を示していると言えよう。年号本以降はこの詞書を持つ伝本と照合し、「はじめて人につかはしける」という詞書を付したと考えられる。

元良のみこのみそかにすみ侍ける今こむとたのめてこずなりにければ　　兵衛

ひとしれずまつにねられぬ晨明の月にさへこそあざむかれけれ

（天福本・恋六・1032）

期待させておきながらも訪れなかった元良親王に対して、兵衛が「あざむかれけれ」と切ない心情を訴える。このうち、詞書「たのめて」には【表3】に示す本文異同がある。無年号本はいずれも「いひて」とするのに対し、年号本以降は「たのめて」とする。なお、異本系統はいずれも「いひて」としており、[19]定家本の特徴的表現として注目される。年号本以降が「たのめて」と校訂した背景には如何なる理由が考えられようか。

勅撰集の詞書を見てゆくと、当該歌と同じ詠歌状況を記す場合、しばしば「たのむ」という言葉が用いられる。

しのびてかよひ侍ける人いまかへりてなどたのめをきておほやけのつかひにいせのくに、まかりて帰まうできてひさしうとはず侍ければ　　少将内侍

人はかる心のくまはきたなくてきよきなぎさをいかですぎけん

（後撰集・天福本・恋五・944）

人のたのめてこずはべりければつとめてつかはしける　　和泉式部

おきながらあかしつるかなともねせぬかものうはげのしもならなくに

（後拾遺集・恋二・681）

兼房朝臣月いでばむかへにこむとたのめておとせざりければよみはべりける　　江侍従

月みれば山のはたかくなりにけりいでばといひし人にみせばや

（後拾遺集・雑一・856）

当該歌は、年号本や無年号本の「いひて」としても、和歌の解釈そのものには影響を及ぼさない。しかし、ここでは年号本以降の「たのめて」とする方が、よりふさわしいことは明らかである。このような判断によって、定家は当該歌の詞書

を「たのめて」に校訂したと考えられる。

二―二、和歌の解釈に関わる校訂

詞書の本文校訂は、時に和歌の解釈にも影響を及ぼす。ここでは恋一・534―537番歌を検討対象としたい。まず、定家本のうち最も初期段階に位置する無年号A類本（中院本）から本文を掲出する。

女のもとに
あふ事はいとゞ雲ゐのおほぞらにたつなのみしてやみぬばかりか
返し
よそながらやまむともせずあふことはいまこそくものたえまなるらめ
又おとこ
いまのみとたのむなれどもしらくものたえまはいつかあらんとすらむ
をんな
おやみなくあめさへふればさはみづのまさるらんともおもほゆるかな
（中院本・恋一・534―537）

中院本を見る限り、この四首は一連の贈答歌と捉えられる。しかしながら、最後の537番歌の詞書「をんな」には、【表4】に示す本文異同がある。A類本「をんな」B類本「返し」とする場合、この四首は一連の贈答歌となる。一方で、年号本以降の多くの諸本のように「題しらず」とする場合、534―537番歌は次のようになる。

女のもとに
逢事はいとゞ雲井のおほぞらにたつなのみしてやみぬ許か
返し
よそながらやまむともせず逢事は今こそ雲のたえまなるらめ
又おとこ
今のみとたのむなれども白雲のたえまはいつかあらんとすらん
題しらず
をやみせず雨さへふれば沢水のまさる覧ともおもほゆる哉
（天福本・恋一・534―537）

前の三首は変わらないが、四首目を「題しらず」とすることによって、ひと続きの贈答歌とは捉えられなくなる。なお、異本系統も揺れがあり、二荒山本・片仮名本は「をむな」、雲州本・承保本は「返し」、伝坊門局筆本は「題不知」とする。何故、定家は四首目の詞書を「題しらず」としたのであろうか。

贈答歌の場合、贈られた歌の発想や言葉を、返歌の中で繰り返し用いることが暗黙の了解とされる。ここで、534―537番歌における言葉のつながりを見てゆきたい。まず、前三首を

見ると534「逢事は」535「逢事は」、534「雲井」535「雲」536「白雲」、535「たえま」536「たえま」というように、複数の言葉を、前歌を踏まえて繰り返し用いている。この前三首が、一連の贈答歌であることは疑いない。

一方で、最後の537番歌を見ると、前歌からの言葉のつながりは534「やみぬ」535「やまむ」537「をやみせず」と、「やむ」という言葉しか見受けられない。さらに、この「やむ」も個別に見てゆくと、534・535番歌の「やむ」は、逢うことが絶えるという「止む」を意味するのに対し、537番歌の「やむ」は「雨が止む」ことを意味する。最後の537番歌は、前歌からの言葉の繋がりが弱く、一連の贈答歌とは認め難い。

加えて、返歌にあたる二首目・四首目の女の心情を比較すると、537番歌の特異性が浮かび上がる。まず、二首目の535番歌では「逢うことは今こそ雲のたえまなるらめ」と、逢えないと嘆く男を、女が諌めている。一方で、四首目の537番歌は、「沢水のまさる覧とも思ほゆるかな」とある。この表現は、諸注釈書が指摘する如く[20]、「まこも刈る淀の沢水あめふれば常よりことにまさるわが恋」（古今集・恋歌二・587）をもとにしている。つまり、女は沢水が増えるように、自身の恋心が募ると訴えているのである。537番歌を、女からの直接の再返歌とするには、あまりにも心情の変化が大きすぎる。

ここまでの検討を踏まえると、537番歌を一連の贈答歌ではなく、「題しらず」歌とすべきことは明白であろう。定家が「題しらず」と校訂するにあたっては、以上述べてきた内容を根拠としたと考えられる。

次に、185番歌の本文異同を取りあげる。まず先程と同じく、無年号A類本（中院本）から本文を掲げる。

五月ながあめのころ人の許にまかれりけるにこれかれものかたらひけるほどに思わすれてやゝひさしくありてきたりつらむ人はありやとゝひければいひいれ侍ける　（よみ人しらず）

つれ〴〵とながむるやどのほとゝぎすとふにつけてぞねはなかれける[21]　（中院本・夏・185）

A類本に記されるこの非常に長い185番歌の詞書は、B類本以降全く異なる様相を見せる。以下、天福本から本文を掲出する。

五月なが雨のころひさしくたえ侍にける女の許にまかりたりければ女　（よみ人しらず）

つれ〴〵とながむるそらの郭公とふにつけてぞねはなかれける　（天福本・夏・185）

当該歌の本文異同について、杉谷氏は「定家はB類本において承保本の詞書を取り入れたという場合も考えられるかもしれない」と言及し、詞書が簡略化・合理化されている旨を指摘した[22]。確かに、異本系統の詞書を見ると、承保本「五月ながあめのころひさしくたえ侍ける女のもとにまかりたりけれ

ば女」伝坊門局筆本「五月なが雨のころひさしくたえ侍にける女のもとにまかりたりければ女」と、B類本以降と同様の詞書を有する。承保本や伝坊門局筆本、あるいはこれらの祖本との照合によって校訂が行われたと見るべきである。

さらに、「当該歌の作者は誰か」という視点から、定家の校訂意識を導き出すことも可能であろう。まず、A類本を見ると「思わすれてや、ひさしくありてきたりつらむ人はありや」と女が言い、男が歌を送る。つまり、当該歌の作者は男である。対してB類本以降は、「五月なが雨のころ……まかりたりければ」までは男の行動であるが、最後に「女」とあるため、作者は女となる。つまり、A類本からB類本に移行する段階で、和歌の作者が「男」から「女」に変化しているのである。ではこの場合、作者は「男」と「女」のどちらがふさわしいのか。この観点から、定家の校訂意識を紐解きたい。

当該歌の下句は「とふにつけてぞねはなかれける」とある。つまり、作者は「郭公」が訪ねて来るにつけても、声を出して泣かずにはいられないと訴えているのである。この泣く主体＝作者は、果たしてどちらが良いか。男の訪問が途絶えているという状況を考慮すると、声を出して泣くのは、「女」とみる方が妥当であろう。反対に「郭公」は、なかなか訪ねてこない「男」を示していると見て良い。方々に飛び回る「郭公」は、しばしば浮気な相手に喩えられた。

ほととぎすながなくさとのあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから　（古今集・夏歌・147）

たがさとに夜がれをしてか郭公ただここにしもねたるこゑする　（古今集・恋歌四・710）

当該歌の本文校訂には、他本による照合を基盤とするとともに、作者を「女」とすべきであるという定家の判断があったと考えられる。

ここまで、詞書の本文異同を取り上げ、検討を進めてきた。定家は他本との照合を前提としつつ、それぞれの詠歌状況にふさわしい表現に改め、必要に応じて合理的に校訂を行っていることがわかる。

三、和歌本文における定家本『後撰和歌集』の展開

三―一、歌語の表現に関する校訂

次に、和歌本文に焦点を当て、定家がどのような意識のもとに本文校訂を行ったのか、その具体的様相について考察を試みる。

（題しらず）　（よみ人しらず）

花だにもまださかなくに鶯のなくひとこゑを春とおもはむ　（天福本・春上・36）

鶯の声を聞いて、春の訪れを感じるという趣向である。このうち、五句目の「春とおもはむ」の本文異同を【表5】に示

す。無年号本が「いふらむ」とするのに対し、年号本以降は「思はむ」とする。なお、異本系統も本文に揺れがあり、一定ではない[23]。ここで定家が「思ふ」に校訂した背景には、如何なる要因が想定されようか。

ここで注目すべきは、当該歌が「鶯」の声を詠み込むことである。「鶯」の声を聞いて、「春を思う」という趣意は、先行する『古今和歌集』にも用例が見出せる。

春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ　（古今集・春上・11）

やまのはに鶯なきて打ちなびき春と思へど雪はふりつつ　（古今和歌六帖・のこりのゆき・35）

『古今和歌集』にも見られる「鶯」＋「春と思ふ」という定型化した表現を踏まえ、当該歌は「春とおもはむ」に校訂されたと考えられる。

兼輔朝臣なくなりてのち土左のくによりまかりのぼりてかのあはたの家にて　つらゆき

ひきうへしふたばの松は有ながら君がちとせのなきぞ悲き　（天福本・慶賀哀傷・1411）

土佐から帰京した貫之が、親交のあった兼輔への哀悼の意を詠む。このうち初句「ひきうへし」は、【表6】に示す本文異同がある。家仁本（無年号B類）以降は「うへをきし」を「ひきうへし」とすることで、「引く」の意味が加わることに注意したい。なお異本系統を見ると、管見の限り「ひきうへし」とするものはなく[24]、定家本の特徴的な表現と言える。

当該歌は「松」と「千歳」を取り合わせて用いるが、この二つでまず思い起こすのは、「小松引き」の行事であろう。正月最初の子日、野に出て小松を根引きして健康と長寿を願うこの年中行事は、好んで和歌の題材とされた。その際は、専ら「松」「千歳」とともに「引く」という言葉を合わせて用いることが多い。

題しらず　ただみね

子の日するのべにこ松のなかりせば千世のためしになにをひかまし

入道式部卿のみこの、子の日し侍りける所に　大中臣よしのぶ

ちとせまでかぎれる松もけふよりは君にひかれて万代やへむ　（拾遺集・春・23―24）

翻って、当該歌を見ると「ふたばの松」「千歳」という言葉から、かつて長寿を願った子日の「小松引き」を思い起こし、貫之が歌を詠んでいることは明らかである。そうであるならば、「引く」という言葉は、必要な言葉だと言える。

ひきてうへし人はむべこそ老にけれ松のこだかく成にける哉　（後撰集・天福本・雑一・1107）

ふたばにてわがひきうゑしまつのきのえださすはるになりにけるかな　（好忠集・451）

定家は、このような先行歌に見られる表現を踏まえ、「うへをきし」から「ひきうへし」に校訂したと考えられる。

（題しらず）　（つらゆき）
あき風のやゝふきしけば[のをさむみ]わびしきこゑに松虫ぞ鳴　（天福本・秋上・261）

秋風が吹きしきる野で、つらそうな声で鳴く松虫の声を詠む。このうち、四句目「のをさむみ」の本文異同は【表7】に示す通りである。校訂前は、「夜が寒いので松虫が鳴いている」となるのに対し、校訂後は「野が寒いので松虫が鳴いている」と解釈出来よう。なお異本系統も、本文に揺れがある。[25]

校訂前の「夜を寒み」という表現自体は、頻繁に用いられるものの、[26]管見の限り「夜が寒い」ことと「松虫」を取り合わせる例はない。当該歌が「夜を寒み」という表現を用いることにはやや疑問が残る。一方の「野を寒み」は、非常に稀な表現であった。当該歌で用いられた後は、鎌倉期成立の『新撰和歌六帖』まで例を見ない。[27]このような状況下、定家が「野を寒み」とした背景には、如何なる理由が考えられようか。

まず、和歌において「野」と「松虫」は、典型的に取り合わせて用いられた。その用法も定型化しており、「松虫」が鳴いている場所はいずれも「野」とする。

秋の[の]に道もまどひぬ松虫のこゑする方にやどやからまし
あきの[の]に人松虫のこゑすなり我かとゆきていざとぶらはむ　（古今集・秋歌上・201―202）

この「松虫」の鳴き声と「野」の取り合わせは、定家自身も、同趣向の歌を残している。

たづぬれば花の露のみこぼれつつ[野]風にたぐふ松虫の声　（拾遺愚草・上・230）
松虫のこゑをとひゆく秋の[野]に露たづねける月の影かな　（拾遺愚草・上・1044）

さらに、当該歌の前後の配列を見てゆくと、本文校訂の意義がより明確になるであろう。

（題しらず）　（つらゆき）
こむといひしほどやすぎぬる[秋のゝ]に誰松虫ぞこゑのかなしき
[秋のゝ]にきやどる人もおもほえずたれを松虫こゝらなくらん
あき風のやゝふきしけば[の]をさむみわびしきこゑに松虫ぞ鳴
秋くれば[野]もせに虫のをりみだるこゑのあやをばたれかきるらん　（後撰集・天福本・秋上・259―262）

当該歌を含む259―262番歌の歌群は、いずれも「野」で「松虫」が鳴くという情景を詠む。配列をより整序するためには、「野を寒み」とするほうがより適切と言えよう。当該歌の本文は、「松虫」が「野」で鳴くという典型的な和歌表現と、当該歌

群の配列を考慮し、校訂されたと見るべきである。

このように、和歌本文における定家の校訂作業は、他本との照合を基盤としつつ、三代集等に用いられる典型的な技法や表現を根拠として行われていたと言える。

三―二、俊成本・定家本『古今和歌集』との関係

（題しらず）　（よみ人も）

はつしぐれふるほどもなくさほ山の梢あまねくうつろひにけり　（天福本・冬・444）

冬の到来を告げる初時雨が降り、山の梢が移りゆく情景を詠む。このうち、五句目「うつろひにけり」の本文異同を【表8】に示す。無年号A類本が「いろづきにけり」とするのに対し、B類本以降は「うつろひにけり」と本文が変化する。なお、異本系統も本文に揺れがあり、二荒山本・片仮名本・雲州本・伝坊門局筆本は「いろづきにけり」、堀河本・承保本は「うつろひにけり」とする。

当該歌の本文校訂について、杉谷氏は「冬部の巻頭部の歌としては、意味的には同じことになるとしても、「いろつく」よりも「うつろふ」の方がよりふさわしいことからの選択であったのではなかろうか」[28]と述べる。指摘の通り、『後撰和歌集』の他歌を例にとると、「色づく」と「うつろふ」には、明確な用法の違いがあることがわかる。まず、「色づく」は、秋の景物が「色づく」という現象を示す場合に用いられる。

秋はぎの色づく秋を徒にあまたかぞへて老ぞしにける　（天福本・秋中・301）

天河かりぞとわたるさほ山のこずゑはむべも色づきにけり　（天福本・秋下・366）

一方で「うつろふ」は、季節を問わず、そのものの盛りの状態から次第に衰える方向に向かう場合に用いられる。

あひおもはでうつろふ色を見る物を花にしられぬながめする哉　（天福本・春下・59）

いづれをかわきてしのばむ秋の、にうつろはむとて色かはる草　（天福本・秋下・371）

秋はて、わか身しぐれにふりぬれば事の葉さへにうつろひにけり　（天福本・冬・450）

特に、定家は「うつろふ」という語について、ただ色が変化するだけではなく、「盛りから衰える」という意味を意識していたようである。『顕注密勘』「春がすみたなびく山の桜花うつろはむとや色かはり行」（春歌下・69）の項で、以下の見解を示している。まず顕昭が、「うつろふ」について、

うつろふと云事、うちまかせては色変ずる也。うつろふ菊と云も、白菊の紫になる也。此歌にては散ると云べきかと見えたり。

と指摘するのに対し、定家は次のように注を加えている。

花のうつろふ事はちるにはあらず。盛なる時にかはりてちりぬべき色のつくを云也。いつの人まにうつろはん

とや、心づからや、皆同心也。[29]

冬部の巻頭部に位置する444番歌は、秋から冬へと季節が移り変わり、佐保山の梢が移りゆく様子を詠む。この場合、秋の「盛りから衰え」冬を迎えるという情景を映し出すためには「うつろひにけり」の方がよりふさわしい表現であることは言うまでもない。

さらに、この「色づく」から「うつろふ」への本文校訂は、先行する『古今和歌集』において注目すべき事象がある。以下、定家本から当該本文を掲出する。

夜をさむみ衣かりがねなくなへに萩のしたばもうつろひにけり[30]（古今集・秋歌上・211）

おなじえをわきてこのはのうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ[31]（古今集・秋歌下・255）

ちはやぶる神のいがきにはふくずも秋にはあへずうつろひにけり[32]（古今集・秋歌下・262）

今はとてわが身時雨にふりぬれば事のはさへにうつろひにけり[33]（古今集・恋歌五・782）

この四例は、共通して俊成本・定家本が「うつろふ」とするのに対し、多くの諸本が「色づく」「紅葉する」とする。殆どが定家本以前、俊成本の段階で「うつろふ」とするが、基俊本は「色づく」とすることが多い。この本文校訂は、俊成の手によるものと見てよいであろう。[34] つまり、俊成本『古今和歌集』と同様の本文校訂が、定家本『後撰和歌集』においても行われているのである。

このような校訂例は、次に挙げる冬部・500番歌にも見出せる。

（題しらず）　（よみ人しらず）

としくれて春あけがたになりぬれば花のためしにまがふ白雪　（天福本・冬・500）

五句目「まがふ白雪」の本文異同を【表9】に示す。B類本以降の「まがふ白雪」とすると、校訂前とは異なり「見間違う」という意味を含むことに注意したい。異本系統では多くの諸本で「ふれる雪かも」としており、[35] A類本は異本系統に近い本文であると言える。

異本系統やA類本のように「ふれる雪かも」「ふれる白雪」とする場合、「花の先例として降っている雪」「花の手本として降っている雪」[36]という意に解せよう。そのため、「雪」と「花」を見間違えるという意味合いを見出すことは難しい。[37] 何故、定家は「ふれる白雪」を「まがふ白雪」としたのであろうか。

「雪」を「花」に見立てるという趣向は、春を待ち望む心情を表すものとして、古くから好まれた題材であった。定家自身も、同趣向の歌を残している。

庭のおもにきえずはあらねど花とみる雪は春までつぎてふらなん　（拾遺愚草・上・969）

花とみる雪も日数もつもりゐて松の梢は春の青柳　（拾遺愚草・下・2455）

さらに、当該歌の前後の配列に目を向けると、定家の校訂意識がより鮮明に浮かび上がる。

（題しらず）　（よみ人しらず）

むめがえにふりをける雪を春ちかみめのうちつけに花かとぞ見

いつしかと山の桜もわがごとく年のこなたにはるをまつらん

年深くふりつむ雪を見る時ぞこしのしらねにすむ心ちする

としくれて春あけがたになりぬれは花のためしにまがふ白雪

春ちかくふる白雪はをぐら山峯にぞ花のさかりなりける

…

みくしげどのゝ別当にとしをへていひ侍けるをえあはずしてそのとしのしはすのつごもりの日つかはしける　藤原敦忠朝臣

物思とすぐる月日もしらぬまにことしはけふにはてぬとかきく

（後撰集・天福本・冬・497―501・506）

冬部の巻末付近である497―501番歌の歌群は、まもなく訪れる春を期待し「雪」を「花」に見立てる歌が続く。この場合、500番歌の本文を「ふれる白雪」より「まがふ白雪」とする方が、和歌配列がより整序されることは明らかである。「雪」を「花」に見立てるという典型的な表現技法ともに、前後の和歌配列を考慮し、「まがふ白雪」に校訂されたと考えられる。

この「まがふ白雪」への本文校訂も、俊成本・定家本『古今和歌集』において同様の事象が見出せる。以下、本文を定家本より掲げる。

（題しらず）　（よみ人しらず）

梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば

この歌は、ある人のいはく、柿本人まろが歌なり

梅花にゆきのふれるをよめる　小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずともかをだにほへ人のしるべく

雪のうちの梅花をよめる　きのつらゆき

梅のかのふりおける雪にまがひせばたれかことごとわきてをらまし

ゆきのふりけるを見てよめる　きのとものり

雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきてをらまし

物へまかりける人をまちてしはすのつごもりによめる　みつね

わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

（古今集・冬歌・334―338）

三首目336番歌の「まがひせば」を、俊成本系統のうち建久二年本、及び筋切・元永本・六条家本・家長本・前田家本・天理本・伏見宮本・伝寂蓮筆本・寸松庵色紙等、多くの諸本が

「うつりせば」とする。「まがひせば」は、俊成や定家の校訂によって伝わる本文だと言えよう。この場合も、『古今和歌集』と『後撰和歌集』で、同じ表現に関わる本文校訂が見出せるのである。

このように、俊成本・定家本『古今和歌集』において確立された方針が、定家本『後撰和歌集』の校訂作業にも受け継がれていることがわかる。本稿で扱った例はわずかに過ぎないが、この事実は、定家の書写校訂意識を考える上で、重要な意味を持つと言える。

おわりに

本稿は、定家本『後撰和歌集』の本文異同について再検討を試み、その具体的様相を明らかにすることを目的とした。定家の本文校訂は、必ずしも一貫した方針があるとは言い難いが、勅撰和歌集の原則や三代集に見られる表現技法を根拠として、「その場に応じて適切に改める」ものであった。絶えずよりよい本文を追い求め、『後撰和歌集』を一つの勅撰和歌集として体裁の整った歌集にするという地道な作業は、歌人・歌学者として優れた才能を発揮した定家であったからこそなせる業であったと言えよう。

現在、我々の目にする平安朝の古典作品は、定家の手を経て伝わるものが多数を占める。『後撰和歌集』も例外ではなく、定家の書写した天福二年本が広く流布し、現在に至るまで多くの人々に読み継がれてきた。その本文が、どのような過程を経て、天福二年本に見られる本文に至ったのか。『後撰和歌集』という作品と向き合う上で、本文校訂の意義やその背景に迫る姿勢が求められる。

※本稿における『後撰和歌集』本文引用は、断りのない限り、冷泉家時雨亭叢書『後撰和歌集天福二年本』（財団法人冷泉家時雨亭文庫・朝日新聞社・平成十六年）の影印による。ただし、底本に加えられた定家の勘物と行成筆本による校異は省略し、旧字体は全て通行字体に改め、稿者が適宜濁点等を補った。

※異本系統との比較にあたっては、以下の資料に拠った。

・二荒山本・片仮名本・堀河本…『後撰和歌集総索引』（大阪女子大学国文学研究室・昭和四十年）

・雲州本…『後撰和歌集［雲州本］と研究』（久曽神昇・深谷礼子編著・未刊国文資料刊行会・昭和四十三年）

・承保本…天理図書館善本叢書和書之部『後撰和歌集別本・詞花和歌集』（八木書店・昭和五十九年）

・伝坊門局筆本…『後撰和歌集 伝坊門局筆本』（片桐洋一編・和泉書院・平成二十年）

※その他の勅撰和歌集・私撰集・私家集の本文引用は、『新編国歌大観』による。

注

（1）杉谷寿郎『後撰和歌集諸本の研究』（笠間書院・昭和四十六年）

（2）岸上慎二「後撰集定家本の展開」（「日本大学文学部研究年報」第六輯・昭和三十一年十二月／『後撰和歌集の研究と資料』新生社・昭和四十一年）

（3）片桐洋一「『後撰集』の伝本」（「女子大文学国文篇」第十七号・昭和四十年十一月／『古今和歌集以後』笠間書院・平成十二年）

（4）杉谷寿郎「定家の本文」（「国文学研究資料館調査報告」第十五号・平成六年三月）がある。

（5）嘉禎二年本系統は、天福本において校合した行成本の本文を徹底的にいかしたものとなっており、従来の定家本系統の本文とは大きく異なる。また片桐氏（注3）も、「最も後期に書写された嘉禎二年本にその本文校訂の到達点を考えるのが筋道であるが、その嘉禎本は著しく特殊な成立過程を持つ本であるため、この任には適さない」と指摘されている。そのため、本稿では無年号A類本から天福二年本までを検討対象とした。

（6）京都大学図書館ホームページ（http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/k06/index.html）の画像データベース及び『後撰和歌集総索引』（大阪女子大学国文学研究室・昭和四十年）の翻刻による。

（7）『後撰和歌集総索引』（大阪女子大学国文学研究室・昭和四十年）の翻刻による。

（8）冷泉家時雨亭叢書『後撰和歌集天福二年本』（財団法人冷泉家時雨亭文庫・朝日新聞社・平成十六年）の影印による。

（9）天福二年本に至る本文異同の過程については、杉谷寿郎氏に「定家の本文校訂は、無年号本から発展した承久三年本において、天福二年本に至る一応の落着をみて基礎が築かれ、貞応元年七月本においてさらに固定的となったが、その後無年号や承久本的要素が加味されることもあり、校訂本ごとに少しずつ揺れ行き戻りしながら進展し、天福二年本に至って貞応元年七月本にやや近づいて終局をみたものである。」と指摘がある。（注1参照）

（10）注4参照

（11）俊成の『古来風体抄』も、当該歌を「天の帝の御製」とする。

（12）岸上慎二氏は、「定家本無年号本の、あめのみかどの表現は、天智天皇の「あめのみかど」の俗称の発生後の異文と考えてよいものであらう。」と指摘される。（岸上慎二「後撰集の天智天皇歌一首について」（「語文」（日本大学）第八輯・昭和三十五年五月）／『後撰和歌集の研究と資料』新生社・昭和四十一年）

（13）異本系統との比較対照においては、二荒山神社蔵・藤原教長筆本後撰集【二荒山】（巻十まで）・加納諸平旧蔵・片仮名本後撰集【片仮名】（巻十まで）・宮内庁書陵部蔵・伝堀河宰相具世筆本後撰集【堀河】・雲州公旧蔵・後撰和歌集【雲州】・天理図書館蔵・伝正徹筆後撰和歌集【承保】・伝坊門局筆本【坊門局】を用い、以下略称によって示した。

（14）【雲州】あめのみかど【坊門局】あめのみかどの御製

（15）山田孝雄「あめのみかど考」（「芸林」第二巻第一號・昭和二十六年二月）

（16）新日本古典文学大系29『袋草紙』（藤岡忠美校注・岩波書店・平成七年）・46頁

（17）井上宗雄「勅撰集の作者表記」（「国文学解釈と鑑賞」昭和四十三年三月号）

（18）【堀河】ナシ【雲州】題しらず

(19) 【堀河】いひて【雲州】いひて【承保】いひて【坊門局】いひて

(20) 『後撰集新抄』（中山美石著・歌書刊行会・大正元年／風間書房復刻・昭和六十三年）・笠間注釈叢刊13『後撰和歌集全釈』（木船重昭著・笠間書院・昭和六十三年）・新日本古典文学大系6『後撰和歌集』（片桐洋一校注・岩波書店・平成二年）・『後撰和歌集』（工藤重矩校注・和泉書院・平成四年）

(21) A類本のみ「ながむるやど」とする。また、異本系統において二荒山本・片仮名本・堀河本・雲州本・伝坊門局筆本は「そら」、承保本は「やど」とする。

(22) 注4参照

(23) 異本系統の異同：【二荒山】はるとおもふらん【片仮名】ハルトオモフラム【堀河】春と思はむ【雲州】はるとおもはむ【承保】春といふらん【坊門局】はるとおもはん

(24) 異本系統の異同：【堀河】君がうへし【雲州】うへをきし【承保】君がうへし【坊門局】うへをきし

(25) 異本系統の異同：【二荒山】本文脱落【片仮名】ヨヲサムミ【堀河】野をさむみ【雲州】野をさむみ【承保】よをさむみ【坊門局】夜をさむみ

(26) 夜を寒み衣かりがね鳴くなへに萩の下葉もうつろひにけり（古今集・秋歌上・211）夜をさむみねざめてきけばをしぞなく払もあへず霜やをくらん（後撰集・天福本・冬・478）等がある。

(27) 野をさむみたかもましろにふる雪のおち草とめてあさるかり人（新撰和歌六帖・732）

(28) 注4参照

(29) 『日本歌学大系』別巻五（久曽神昇編・風間書房・昭和五十六年）・152頁

(30) いろづきにけり（私稿本・元永本・筋切・基俊本・家長本・前田家本・天理本・伏見宮本）

(31) いろづくは（雅経本・高野切・六条家本・雅俗山庄本・基俊本・筋切・元永本・建久二年本）

(32) 色づきにけり（元永本・筋切）—紅葉しにけり（唐紙巻子本・公任切・寸松庵色紙・雅経本）

(33) おとろへにけり（六条家本・家長本・前田家本・伏見宮本）—いろづきにけり（基俊本）

(34) この定家本・俊成本の独自表記については、片桐洋一氏「俊成本・定家本の成立」で詳細な検討がなされており、参照されたい。（原題「古今和歌集本文臆見—俊成本・定家本の成立を中心に—」（『国語国文』第三十八巻第六号・昭和四十四年）／『古今和歌集の研究』明治書院・平成三年）

(35) 異本系統の異同：【二荒山】ふれる雪かも【片仮名】フレルユキカモ【堀河】ふれる雪かも【雲州】ふれる雪かも【承保】まがふ白雪【坊門局】まがふ白雪

(36) 『後撰和歌集』（工藤重矩校注・和泉書院・平成四年）・頭注による。

(37) 杉谷氏は当該歌の本文校訂について「承保本にみる「まかふ白雪」という本文を取るようになったのは、雪と花との色が見分けがつかなくて見間違うことをいう場合、当代一般に、「まかふ」が用いられたことに拠っていよう」と指摘される。（注4参照）

（たけばた・のりこ　滋賀県立甲南高等学校教諭）

【表1】同一人物における作者名表記の本文異同一覧

巻	歌番号															
《無年号A類》中院	17	春上	藤原兼輔朝臣	春上	紀長谷雄朝臣	春中	左兵衛督師尹朝臣	秋上	藤原兼三朝臣	秋中	前中宮宣旨	秋中	あめのみかどの御製	秋下	大納言伊望がむすめ	秋下	源のわたすの朝臣	恋二	大納言あきたゞ	恋二	権中納言時望	恋二	閑院三のみこ	恋三	三のみこ	恋五	閑院三のみこ
《無年号A類》飛鳥井	39	春上	紀長谷雄朝臣	春中	左兵衛督師尹朝臣	秋上	藤原兼三朝臣	秋中	前中宮宣旨	秋中	あめのみかどの御製	秋下	大納言伊望がむすめ	秋下	源のわたすの朝臣	恋二	大納言あきたゞ	恋二	権中納言時望	恋二	閑院三のみこ	恋三	三のみこ	恋五	閑院三のみこ
《無年号B類》二条	17	春上	藤原兼輔朝臣	春上	紀はせおの朝臣	春中	左兵衛督師尹朝臣	秋上	藤原のかねみの朝臣	秋中	前中宮少将内侍	秋中	あめのみかどの御製	秋下	大納言伊望女	秋下	源わたすの朝臣	恋二	大納言あきたゞ	恋二	権中納言時望	恋二	閑院三のみこ	恋三	三のみこ	恋五	さだもとのみこ
《無年号B類》家仁	17	春上	中納言兼輔朝臣	春上	紀はせおの朝臣	春中	左兵衛督師尹朝臣	秋上	藤原かねみの朝臣	秋中	前中宮少将内侍	秋中	あめのみかどの御製	秋下	大納言伊望女	秋下	源わたす朝臣	恋二	大納言顕忠	恋二	権中納言時望	恋二	閑院三のみこ	恋三	三のみこ	恋五	さだもとのみこ
《承久三年》二十一	17	春上	藤原兼輔朝臣	春上	紀長谷雄朝臣	春中	藤原師尹朝臣	秋上	藤原兼三	秋中	中宮宣旨	秋中	天智天皇御製	秋下	平伊望朝臣女	秋下	みなもとのわたす	恋二	藤原顕忠朝臣	恋二	平時望朝臣	恋二	貞元のみこ	恋三	紀内親王	恋五	さだもとのみこ
《承久三年》葉室	17	春上	中納言兼輔朝臣	春上	中納言長谷雄朝臣	春中	藤原師尹朝臣	秋上	藤原兼三	秋中	中宮宣旨	秋中	天智天皇御製	秋下	平伊望朝臣女	秋下	源わたす	恋二	藤原顕忠朝臣	恋二	平時望朝臣	恋二	元良のみこ	恋三	紀内親王	恋五	さだもとのみこ
《貞応元年七月》常縁	17	春上	藤原兼輔朝臣	春上	紀長谷雄朝臣	春中	藤原師尹朝臣	秋上	藤原兼三	秋中	前中宮宣旨	秋中	天智天皇御製	秋下	平伊望朝臣女	秋下	源わたす	恋二	藤原顕忠朝臣	恋二	平時望朝臣	恋二	貞元のみこ	恋三	紀内親王	恋五	さだもとのみこ
《貞応二年》俊定	17	春上	藤原兼輔朝臣	春上	紀長谷雄朝臣	春中	藤原師尹朝臣	秋上	藤原兼三	秋中	前中宮宣旨	秋中	天智天皇御製	秋下	平伊望	秋下	源わたす	恋二	藤原顕忠朝臣	恋二	平時望朝臣	恋二	貞元親王	恋三	紀内親王	恋五	さだもとのみこ
《貞応二年》太山寺	17	春上	藤原兼輔朝臣	春上	紀長谷雄朝臣	春中	藤原師尹朝臣	秋上	藤原兼三	秋中	前中宮宣旨	秋中	天智天皇御製	秋下	平伊望朝臣女	秋下	源わたす	恋二	藤原顕忠朝臣	恋二	平時望朝臣	恋二	貞元親王	恋三	紀子内親王	恋五	貞元親王
《天福二年》天福	17	春上	藤原兼輔朝臣	春上	紀長谷雄朝臣	春中	藤原師尹朝臣	秋上	藤原兼三	秋中	中宮宣旨	秋中	天智天皇御製	秋下	平伊望朝臣女	秋下	源わたす	恋二	藤原顕忠朝臣	恋二	平時望朝臣	恋二	貞元のみこ	恋三	紀内親王	恋五	さだもとのみこ

哀傷歌	哀傷歌	雑二	雑二	雑一	恋六	恋六
1400	1390	1182	1169	1096	1035	1011
閑院右大臣	兼輔朝臣	いへあるじのとしこ	むさし	藤原元輔朝臣	宇多院の女五みこ	伊衡朝臣のむすめ
閑院右大臣	兼輔朝臣	いへあるじのとしこ	むさし	藤原元輔朝臣	宇多院の女五みこ	伊衡朝臣のむすめ
閑院大臣	中納言兼輔	いへあるじのとしこ	つり殿のみこのもとに侍ける武蔵	藤原もとすけ	宇多院の女五みこ	これひらの朝臣のむすめ
閑院大臣	兼輔朝臣	家あるじ俊子	つり殿のみこのもとに侍ける武蔵	藤原元輔	宇多院の女五みこ	これひらの朝臣のむすめ
閑院左大臣	兼輔朝臣	俊子	むさし	藤原元輔	女五のみこ	これひらの朝臣女いまき
閑院左大臣	兼輔朝臣	俊子	武蔵	藤原元輔	女五のみこ	これひらの朝臣女いまき
閑院左大臣	兼輔朝臣	俊子	武蔵	藤原元輔	女五のみこ	これひらの朝臣女いまき
閑院左大臣	兼輔朝臣	俊子	武蔵	藤原元輔	女五のみこ	これひらの朝臣女いまき
閑院左大臣	兼輔朝臣	とし子	武蔵	藤原元輔	女五のみこ	これひらの朝臣女いまき
閑院左大臣	兼輔朝臣	俊子	武蔵	藤原元輔	女五のみこ	これひらの朝臣のむすめいまき

【表2】1012番歌・詞書本文異同

《無年号A類》中院	題しらず
《無年号A類》飛鳥井	題しらず
《無年号B類》二条	題しらず
《無年号B類》家仁	題しらず
《承久三年》二十一	はじめて人につかはしける
《承久三年》葉室	はじめて人につかはしける
《貞応元年七月》常縁	はじめて人につかはしける
《貞応二年》俊定	はじめて人につかはしける
《貞応二年》太山寺	はじめて人につかはしける
《天福二年》天福	はじめて人につかはしける

【表3】1032番歌・詞書「たのめて」本文異同

《無年号A類》中院	いひて
《無年号A類》飛鳥井	いひて
《無年号B類》二条	いひて
《無年号B類》家仁	いひて
《承久三年》二十一	たのめて
《承久三年》葉室	たのめて
《貞応元年七月》常縁	たのめて
《貞応二年》俊定	たのめて
《貞応二年》太山寺	たのめて
《天福二年》天福	たのめて

【表4】537番歌・詞書本文異同

《無年号A類》中院	《無年号A類》飛鳥井	《無年号B類》二条	《無年号B類》家仁	《承久三年》二十一	《承久三年》葉室	《貞応元年七月》常縁	《貞応二年》俊定	《貞応二年》太山寺	《天福二年》天福
をんな	をんな	返し	返し	だいしらず	返し	題しらず	題しらず	だいしらず	題しらず

【表5】36番歌・「春と思はむ」本文異同

《無年号A類》中院	《無年号A類》飛鳥井	《無年号B類》二条	《無年号B類》家仁	《承久三年》二十一	《承久三年》葉室	《貞応元年七月》常縁	《貞応二年》俊定	《貞応二年》太山寺	《天福二年》天福
はるといふらん	はるといふらん	はるといふらむ	春といふらむ	春とおもはん	春とおもはん	春とおもはん	春とおもはん	春と思はむ	春とおもはむ

【表6】1411番歌・「ひきうへし」本文異同

《無年号A類》中院	《無年号A類》飛鳥井	《無年号B類》二条	《無年号B類》家仁	《承久三年》二十一	《承久三年》葉室	《貞応元年七月》常縁	《貞応二年》俊定	《貞応二年》太山寺	《天福二年》天福
うへおきし	うへおきし	うへをきし	曳うへし	引うへし	ひきうへし	ひきうへし	引うへし	ひきうへし	ひきうへし

【表7】261番歌・「のをさむみ」本文異同

《無年号A類》中院	《無年号A類》飛鳥井	《無年号B類》二条	《無年号B類》家仁	《承久三年》二十一	《承久三年》葉室	《貞応元年七月》常縁	《貞応二年》俊定	《貞応二年》太山寺	《天福二年》天福
よをさむみ	よをさむみ	夜をさむみ	野をさむみ	野を寒み	野をさむみ	野をさむみ	野をさむみ	野をさむみ	のをさむみ

【表8】444番歌・「うつろひにけり」本文異同

《無年号A類》中院	《無年号A類》飛鳥井	《無年号B類》二条	《無年号B類》家仁	《承久三年》二十一	《承久三年》葉室	《貞応元年七月》常縁	《貞応二年》俊定	《貞応二年》太山寺	《天福二年》天福
いろづきにけり	いろづきにけり	うつろひにけり	うつろひにけり	うつろひにけり	うつろひにけり	うつろひにけり	うつろひにけり	うつろひにけり	うつろひにけり

【表9】500番歌・「まがふ白雪」本文異同

《無年号A類》中院	《無年号A類》飛鳥井	《無年号B類》二条	《無年号B類》家仁	《承久三年》二十一	《承久三年》葉室	《貞応元年七月》常縁	《貞応二年》俊定	《貞応二年》太山寺	《天福二年》天福
ふれるしらゆき	ふれるしらゆき	まがふ白雪	まがふ白雪	まがふしら雪	まがふ白雪	まがふしら雪	まがふしら雪	まがふ白雪	まがふ白雪